

絆

平成23年の、世相を表す漢字が決まりました。

清水寺（京都市東山区）の森清範貫主が、縦約1.5メートル、横約1.3メートルの和紙に、大きな筆で墨痕も鮮やかに書き上げた一字は「絆」です。

「今年の漢字」は、財団法人の日本漢字能力検定協会が1995年から始めたもので、これまでに選ばれた漢字を見てみると、その年の世相が浮かび上がってきます。

「今年の漢字」がスタートした1995年は阪神・淡路大震災や地下鉄サリン事件が発生した年であり、選ばれた漢字は「震」でした。

1996年は、O-157による食中毒や狂牛病が発生し、大きな社会問題となり、選ばれた漢字も「食」でした。

1998年は、和歌山毒物カレー事件が発生した他ダイオキシン問題も社会に大きな不安を与えたこともあり、「毒」という漢字が選ばれました。

1999年は「末」です。文字通り世紀末ということでした。

アメリカ同時多発テロ事件が発生したのは2001年でしたが、そのテロ事件を発端にしてアメリカ軍によるアフガニスタン侵攻が始まりました。結果選ばれた漢字は「戦」です。

2004年は新潟県中越地震はじめ、新潟・福島豪雨、台風23号など災害が多発した年で「災」という漢字が選ばれました。

2007年は、「白い恋人」などの食品表示の偽造が次々と発覚。この他、年金記録問題など多くの問題が発生し、結果選ばれたのは「偽」という漢字でした。

紙面の都合もあり、詳しくは紹介できませんが、選ばれた漢字を見ると、それぞれ当時の時代背景を良く捉えていると感じます。

今年は、協会によると、全国から過去最多の49万6997通の応募があり、「絆」は最多の6万1453通（12.4%）を獲得したとのことでした。

3月11日に発生した東日本大震災は、今までに見たことも経験したこともないような甚大な被害を東北各地域にもたらしました。津波によって家族が引

き裂かれ、家を失い、暮らしの基盤をなくされた方々が沢山いらっしゃいます。逃げまどう人々が、津波に飲み込まれていく様子、田や畑、工場や住宅が津波に押し流されていく様子は、日本人の心に大きな影響を与えました。同時に、被災者の皆さんが、静かに悲しみに耐えながら助け合っている姿は、日本人のみならず世界の人々に感動を与え、日本人の精神性が高く評価もされました。

私たちは、3・11によって、家族や友人といった身近な人だけでなく、地域の人々など多くの人々との関わりの中で生きていること、そして、そうした人と人との「絆」の大切さについて再認識することになりました。

勿論、今年は、悲しい出来事だけではありません。

FIFA女子ワールドカップでは日本代表の「なでしこジャパン」が優勝しました。チームワークと信頼、そして最後まで諦めない気持ちで闘い、優勝を手にした彼女たちの活躍を通して、感動だけでなく「絆」の大切さを感じ取った人も多いことでしょう。

このように、今年は、人と人との「絆」の大切さを感じることの多い1年だったといえます。しかし同時に、「絆」の大切さが叫ばれる一方では、親が子を殺し、子が親を殺す。子どもが、いじめを苦にして自殺する。更には、誰にも看取られず一人で孤独死してしまう、というような悲惨な事件が後を断たないというのもまた、日本の現実の姿です。

「絆」は、もともとは「馬や犬など、動物を繋ぎとめるための綱」のことですが、そこから、家族や友人などとの「断つに忍びない恩愛」「離れがたい情実」という、心の結びつきを意味するようになっていったもののようです（広辞苑などから）。

動物を繋ぎ止める綱は、太く丈夫でありさえすれば切れたりもしないでしょうが、目には見えぬ心の結びつきはどうでしょうか。如何に太い「絆」に感じていても、一瞬にして別れ別れになってしまうことは稀ではありません。

「絆」というものは、「蜘蛛の糸（芥川龍之介作）」のように、どんなに丈夫な糸であっても、人の心の有り様で繋ぎ止めもするし、ぷつりと音を立てて切れもします。

結局、「絆」という紐は、自分と相手とが、それぞれ互いに持ち続けようという意志と努力なしには維持することができない程に危うい存在だということ、我々は知っておく必要があるでしょう。（塾頭 吉田 洋一）